明治大学博物館　玉里舟塚古墳の埴輪群

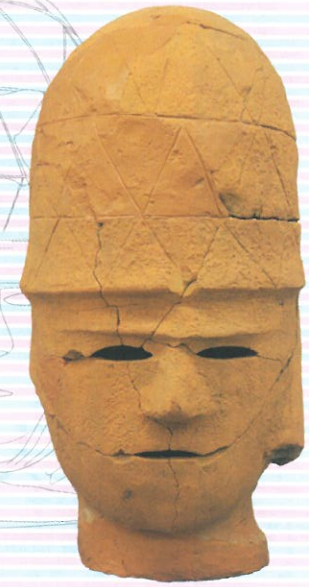
埴輪（はにわ）は、古墳の上に並べられた土製のやきものです。筒形の円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪は古墳の周囲に垣根のように並べ、一般の世界と葬られた権力者が眠る場所を区切る境界の役割を果たしました。一方、家や道具、おなじみの人や動物の形をした埴輪は形象埴輪と呼ばれ、権力者の生前の生活や葬儀の様子を再現したものとされています。特に、関東地方ではバリエーション豊かな形象埴輪が製作されました。明治大学が 1960 年代に発掘した茨城県小美玉市の玉里舟塚古墳（6 世紀、約 1500 年前）の埴輪群は、1ｍを超えるその大きさと丁寧な仕上げが施された製作技術の高さから、茨城県の代表例として知られています。今回は、彩色されたものなど玉里舟塚古墳の埴輪を特徴づける資料から、古墳の上で展開された埴輪のまつりの姿を紹介します。

≪矛を構える武人埴輪≫（上半身はレプリカ）

国内で唯一の例。特殊な冑をかぶり、顔は赤色で化粧し、つま先まで鉄の小さな板を綴じ合わせた挂甲（灰色で彩色した痕跡がある）を装着する。上半身と下半身を別々に製作する特殊な技法を用いており、全高は 120cm に達する。

≪馬形埴輪≫　（レプリカ）

全長１ｍにも及ぶ大型の馬。口や胸、尻を馬具で豪華に飾る。鞍の右側には全国的にも珍しい足を置く板がついており、横座りスタイルの乗馬方法だったことがわかる。



≪帽子をかぶる男子埴輪≫

玉里舟塚古墳の埴輪は、切れ長の目、高い鼻、写実的な顎など端正な顔立ちで知られる。本例は表情や山形文を描いた丸く高い帽子をかぶっていることから、「琴弾き」あるいは儀礼に参加した「ひざまずく人物」の可能性がある。

≪朝顔形埴輪≫

１ｍを超える大型品。上の部分は、かつて酒や米などを入れて墓に供えていた壷の名残である。円筒部分には粘土帯が横方向に６本めぐるが、中小規模の古墳の埴輪は２～４本であり、最上級クラスであることがわかる。